

まる やま こ
丸 山 キヨ子

学位の種類 文学博士
学位記番号 文第49号
学位授与年月日 昭和59年9月27日
学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当

学位論文題目 源氏物語の仏教
—その宗教性の考察と源泉となる教説についての探究—

論文審査委員 (主査)
教授 菊田茂男 教授 加藤正信
教授 塚本啓祥

論文内容の要旨

目次

一、本論文

源氏物語の仏教

—その宗教性の考察と源泉となる教説についての探究—

二、参考論文

一、うつほ物語における仏教的要素

二、源氏物語と白氏文集

本論文は、源氏物語に描かれている世界の内面性、その深さに関わる問題を究明するために、当時の宗教である仏教との関連において考察したものである。それは、仏教が、その宗教としての本質的なところで、源氏物語とどのように関わっているかをみることであるが、具体的には、物語中枢の重要な人物の精神に関わって、どのように生きて働く「宗教性」を発揮しているかを吟味することである。従来このような観点から扱われた例は余りみられないように思われるので、問題提起の意味をふくめ、また自分としては、これからさらに探求

を進めてゆく序説としての意味をもたせているつもりである。

次にその方法と論文の構成について述べる。源氏物語に仏教に関連した思考・叙述があることは、すでに旧注の時代から指摘され、論じられてきたことである。けれども、従来なされてきたことは、ほとんど、注釈的な意味での出典・故事の指摘、あるいは、作者の知的素養としての仏教事項の指摘であった。此の度の考察は、仏教が、その中心人物の内面の問題に関わって、如何に高度な宗教性においてその人生の究極的な解決に与っているかということに目をむけたいと思うので、まず物語の叙述に従い、人物の言動、内省、思惟を丹念に吟味することで、その目的を果すことにした。第二に、このようにして物語の世界に生きて働く宗教としての仏教は、現実の歴史の中で、具体的にどのような教説であったか、先にみてきた事柄は、歴史的仏教で果して実証することが出来るかという検証をした。それには、一方に仏教史を踏まえて、物語と対象し、叙述に顕著な徴標を示しているものから、次第に何気ない思惟に隠れているようなものを探り出してゆくという方法で行った。そのようにしていく中で、何気ない思惟、言動に潜んでいるものに、従来いわれているような、いわゆる平安時代の仏教だけではなく、前時代、すなわち奈良時代から引き続いている仏教に深い関連のあるものを見出すことが出来た。そこで、さらに、それらの仏教教説が、果して物語作者に直接関係づけられるものであるか、すなわち、その媒体となるものをも考証することを試みた。

本論文では、以上のことを二篇に分けて論述した。第一篇では、序章にその宗教性の高さ深さを代表する例を掲げて問題の所在を明示し、以下それに関わる、またそれと同列に考えられる諸問題を考察詳述した。問題の性質に従って順序づけたので、人物を扱う場合にも、その登場の次第には従っていない。第二篇では歴史的の事実在即して、仏教教説を、一篇との関連で考察した。この場合は先にもふれたように、徴標の顕著なものから、内に潜むものを探っていくので、考察の順序は仏教史からみれば実際の史的順序とは逆になる結果にもなっている。

第一篇 源氏物語における仏教の宗教性の考察

序章 高度の宗教性を端的に示す二つの事例

本章では、横川僧都が浮舟救助に当って示した、仏の救ということに関する言動の完璧さ（手習、夢浮橋）と、紫上が出家の切望を光る君に拒まれ通して、思い到る内省の深さ（御法）を考察し、その高度の宗教性を指摘する。

第一節 物語と宗教との関わりについて、およそ四つほどの見方が考えられるが、源氏物語の場合は、単なる反映でも、物のあはれを描くための手段でもなく、また仏教を唱導する為に物語の形をかりたのでもなく、物語の人物が真摯に人生を歩もうとする故に、必然的に自覚的に当面しなければならない問題として描いている。

第二節 横川僧都と仏の救、浮舟を救助するに当って、三回にわたって示した、仏の救を遂行することにかかる信念と、その自在な言行に注目する。最初に浮舟を見出して、救うべき事を述べたとき、「仏の必ず救い給ふべき際なり」(圈点筆者)といている。

一つには僧都は女人を助けたけれども、それは、「仏」の意志であって、自分はその手助けをするにすぎないということをいっているのである。つぎに「際」といっているのは、仏の遍き救の対象をはっきり言い表わして、この得体の知れない女人も必ず救われるべき人であることを言い表わしているのである。一方に病む母尼を抱え、「けがらひ」を盾に救助を拒む弟子達を叱咤して、敢然として救い入れた時の言動である。二度目は再度の修法のために妹尼の庵を訪れた折、素生も知れぬ年若い女人にかかずらう僧都を、弟子達が憂慮したのに返した言葉に注目する。「齢六十にあまりて、今更に人のもどきを負はむは、さるべきにこそあらめ。」そうして、「仏法の瑕となり侍ることなり」という弟子達の非難には答えず修法をなし、成功している。三度目は、浮舟の生存を知って、かつての思い人薫が僧都を訪ね、浮舟の許へ案内することを依頼した時、僧都はそれは断わったけれども、自ら出家させた浮舟に消息を送って薫の許へ帰るように勤めている。「愛執の罪をはるかしきこえ給ひて」と認めている。それは、浮舟とともに薫の魂の救の為に、敢えて自らをも犠牲にして行ったことなのである。この一貫した捉われぬ自在な態度に注目する。特に注意したいのは、仏の救を委ねられた者としての「総べてのものは救われなければならない」という信念と、それを言行に表す決断である。そうして、それを行う為には自らをも敢えて犠牲にする、大乘仏教の菩薩の思想ともいうべきものを体現していることである。

第三節 紫上の内省 夫たる光る君に最後まで出家を許されなかった紫上は、許されない出家は思い止まり、一度は「うらめしく」も思うが、最後には「わが御身をも、罪軽かるまじきにや、と、うしろめたく思されけり」と諦観する。それは念願の出家が叶わないことを、許さぬ光る君への怨みとして向けるのではなく、内に省みて、自らの罪とし凝視しているのである。仏教的に言えば罪障の自覚といえると思われる。紫上は、救への門出としての出家は叶わなかったけれども、自らの力で如何ともすることの出来ない罪障をたじろがずに見据えたことによって、人間存在としての限界を知った。そうして、そのことでなしうる飛躍をなしえているように思われる。「うしろめたく思されけり」とはあるけれどもその後描かれる死を迎える姿は、静かに落着いて或種の安らぎさええているようであり、後に残る光る

君の悲しみをも包むような心で見守っている。

紫上のこの姿勢で注意したいと思うのは、自らに内在する罪の自覚ということである。理想的に描かれていて、殆ど罪といわれる程の犯しは何も指摘されていない紫上に、このように自覚させていること、それは救われ難い人間存在としての自覚をもたせているのではないかと思われる。

すべての人は救われるべきである。これは救う者の立場からの大前提であるのではないか。横川僧都の浮舟救助の折の最初の言葉も、そこに根ざしていたと思われる。けれども、救われる者の側からいうならば、すべての者は救われるとしても、この己れはどうかと省ること。紫上の場合でいうならば、このように切望する出家が許されない自分の罪障はどんなに重いものか、と受止めなければならぬ、そういう内省を描かれていると思うのである。

最澄の願文にみられる「愚中極愚、狂中極狂、塵禿有情、低下最澄」という告白にも、それをうけて「愚禿親鸞」となった親鸞にも、貫いてみられるものは、他ならぬ己れの罪の底知れぬ深淵の凝視、己れの罪深さの自覚、である。本当に仏の救に与った人々は、一度はすべてそこに沈み入って、それを潑条として、そのような者をも救う仏の慈悲にはじめて目覚まされるのであるけれども、紫上はそこまでいかないまでも、誠実に生きる人としてそれに近い体験をさせられているのではないか。紫上のこの内省には、興福寺の教学、法相唯識の五姓各別の思想がひそんでいるのではないかと思うが、そのことは第二篇で詳しくふれるのでここではひとこと言及するに止めておく。

横川僧都の言動を裏づける宗教的信念と、紫上のこの宗教的敬虔の思と、仏教が「世界宗教」としてもつ根本的な精神は充分言い表わされていると思う。これが、かみあったものとして深められ展開するならば、深い宗教文学、純粋な文学としてしかも高い宗教性をもつものとして、評価されると思うのであるけれども、それは近代文学をまたねばならぬことであって、物語には求むべくもない。ただ別々にでも、こういう叙述があり、作中人物の真摯な信念として、また反省として、深い内面的なものの発露としてあることで注目に価するのではないかと思う。

第一章 横川僧都(一)

横川僧都の捉われぬ自在な姿の全貌を、浮舟救助を中心に考察する。

第一節 横川僧都の造型 僧侶としての信念を貫くと同時に、浮舟に対して常に行届いた配慮を示す人物像として浮舟に関わる三回の言動を通観する。

第二節 浮舟への消息の解釈 自分の手で出家させた浮舟に薫の許へ帰るようという僧都の消息について、従来ほとんど不問に付されていた。が稀に矛盾している、あるいは薫の許

へ帰るなどいっていると説かれていた。僧都の行為は矛盾ではなく救の業の徹底である。今、薫の許に帰るということは、将来薫ともども再び仏の弟子となるためであると諭しているのではないか。そのために僧都は自らをも犠牲にして、浮舟と共に人々の謗を負うことを覚悟しているのである。

第三節 浮舟の側からの考察 浮舟は僧都の勧めに従えなかった。浮舟にはそれなりの経緯があることを看取出来るが、僧都に従えなかったのは、偉大な僧都との間に落差があったからである。

第二章 横川僧都(二)

横川僧都が浮舟に与えた消息は、重大な意味をもつものと思われるので、改めて詳細に考察する。(還俗否定説への反論として)

第一節 消息の検討 もとの御契・愛執の罪をはるかしきこえ給ひて・一日の出家の功德は、はかりなきものなれば、等の還俗・非還俗説の別れ目になる語句に注意して考察、僧都は「一步を進め」て還俗を勧奨しているとする。

第二節 修証菩提と出家・還俗 仏教の目指すところは修証菩提であり、出家、還俗はその道程のことにすぎない。還俗については『涅槃経』を引いて考察、また当時の第一人者たる最澄も空海も形式的なことにはこだわらないことを『末法燈明記』(最澄)『統遍照發揮性靈集』巻十の詩(空海)を引いて謗証する。

第三節 還俗勧奨の真意 僧都の浮舟・薫に対する配慮を検討するために、小乗戒としての『四分律』十三僧残法の二、媒人戒五、を引き、その末尾には例外項目も付されていることを注意、浮舟・薫の様な間柄の場合には、例外事項に該当することを証する。それでもなお還俗させることは、僧都にとっては勇気のいることとして、心地観経、菩薩戒を援用し、大乘の菩薩の思想をもって自らその道を選び、浮舟にも指し示したものとする。

第四節 僧都と浮舟との落差 僧都の境位と浮舟との間には落差があった。それには、宇治十帖における貴族に対する考え方が、正篇の紫上、光る君等に負わせた理想性と異なるものを考えていたからであるとする。

第三章 僧侶像

傑出した僧侶横川僧都の造型を指摘したので、それをとりまくその他の僧侶について考察した。横川僧都は頂点的存在であるが、そこまでに到らないまでも、それぞれ専門家僧侶として、物語の中核的人物に深い関わりをもち、然るべき時には必要な発言をし、また積極的に信ずる所を述べる何人かの人物である。

第一節 (一)夜居の僧都 藤壺・冷泉帝の夜居の僧。冷泉帝が実父を知らず、その礼を尽くさないことに対して天変の諭しがあるのを憂い、山籠りの身を提げて参内、身の危険を犯して事実を奏上する。主体的な決意と発言とをみる。(二)北山の僧都、わらわやみの治療に北山に赴いた光る君の訪問を受け、まず語り出した仏の真理に、光る君は藤壺との一件に凶星を指されたように怖れをもって反省する。貴族的な傾きはあるけれども第一義的なものをもつ僧都である。

第二節 (一)小野の律師 一条御息所の祈りの師。一条の宮に関して誤った思い込みで発言して御息所をいらぬ心労に陥し入れ、そのために加持の効験もないまま死なせてしまう。ただ、山籠りの律師としての一徹さ、一条の宮を思う善意と、助言への決意をみて一応考えておく。(二)宇治山の阿闍梨、八宮の導師として懇ろな指導と、八宮亡き後の姫君達に対する配慮で仏道に即したその誠実さを考える。(三)横川僧都、仏の救を掲げてひたすらその実現を努めた僧侶として、物語の中心人物を導く導師として、最後に出現させられている意義を考える。

結語 源氏物語の僧侶像における特質 すべて官僧であるにも拘らず、単なる御用僧侶から脱出している、「^{ひじり}聖」のイメージをもつ。聖からは菩薩への展望をもつ。終りに、上述の僧侶観と異なる二つの叙述について、それは重視されるべきものでないことを考察して位置づける。

第四章 源氏物語における「ひじり」について

源氏物語の僧侶が、その優れた存在として念入りに造型されている者は「^{ひじり}聖」への志向をもたせられていることを見た。それゆえ源氏物語において「聖」という語の示すイメージを改めて問うてみるいみで探究した。

第一節 「聖」の語の考察 今日「ひじり」の語に「聖」という漢字をあてて自明なことのように用いられているが、その源は定かでない。まず辞書でみる。『説文解字』それを受けたと思われる『大漢和辞典』の解説では、「聖」一字では儒教、老荘思想を記すもののみで仏教関係のものは見当たらない。聖と熟語になっているものの用例では、大漢和には八世紀以後のものとして、仏教関係のものがみられる。

次に歴史的用例でみる。

仮名書きの用例としては万葉集29の歌に「日知」の一例のみ。続いては、古今集仮名序の一例である。あと竹取一、うつほ四、枕草子四とみられ、源氏物語に続いてゆく。竹取以下仏教に関係する用例である。漢字で「聖」と書いたものは、万葉集では339の歌に、清酒を表す意味と儒教的意味の二例のみ。以下、記紀の用例では、紀の推古紀、上宮太子について

の記事で、片岡の飢人の物語と、太子薨去の折の記事に始めて仏教と関連のある用例がみられる。

説文解字の「聖」の儒者的な意味のものと万葉仮名の「日知」の現す意味は共通しているようであり、「聖」と「ひしり」の関連を解く鍵が秘められているようであるが、厳密なこととはつきとめられない。以下記紀の訓読（後代のものではあるが）を一通りみておいた。

一方、用字の問題はおくとして、日本の文献の中で仏教と結びついてくるのには恐らく、説文解字に示される、「智徳最もすぐれ、事理に通ぜぬ所のない人」一天子一上宮太子（皇統の人）という系統に、上宮太子の仏教的造詣が一つになって、仏教的な意味でのすぐれた人という内容をもつ用例がみられるようになったのではないかと思われる。推古紀の用例をこのようにみて、古代後期に入ると「聖」の字で仏教に結びついた用例のみられるものが、源氏物語の時代まで続いている。そこで『日本国現報善悪霊異記』『三宝絵詞』『日本往生極楽記』参考として『大日本国法華験記』等の用例を調査、種々の用例を検証しえたが、『往生極楽記』において、始めて「阿弥陀聖」という専心の修行者に関する名称と「市聖」という名聞を重んじない隠れた存在に対する尊敬をこめた称呼を見出すことが出来た。

第二節 源氏物語における「聖」^{ひじり}について 用例の頻度数、種類等はここでは省略するが、特に仏教に関するものも種々あって、中で最も本来的な姿を示すものは、北山の聖である。また世俗の人に比喩的な意味で用いられる「聖」があってそれを最も多く用いられるのは薫である。源氏物語の中で、その精神性のゆえに尊敬される僧侶は、僧都、阿闍梨で、官僧であるゆえに、それらは「聖」と呼ばれないで「聖だつ」という表現で現されている。横川僧都は、妹尼に「聖」と呼ばれているけれどもこれは、物語では本来的の呼称ではない。

源氏物語における「聖」について考察するために、その背後に連なる歴史的用例の展開と物語における様々な用例に接したが、実際に物語の中の人物として登場し、活躍する「聖」としては、徳高く、験の力を発揮しうる僧であると共に、名聞から自由な僧が描かれ、物語世界の主要人物・皇族貴族達に直接関わりをもって積極的な働をなす官僧達は「聖だつ」者として、官僧としての繋縛から脱している姿を描かれたものであった。それは、空也の姿をそのままに描いてはいないものの、その精神を活かし用いたものといえると思う。

なお近接する「俗聖」についての考察を付しておいた。

第五章 明石入道の造型について

源氏物語の出家者としては特異な存在である明石入道について考察した。それは横川僧都を頂点とする僧侶像に、どのような関わり方をするものであるか、源氏物語の宗教性の質の再吟味として試みたものである。

第一節 明石入道に関わる問題点 出家者たる入道が、自らの第一義のなすべきことを差し置いて、娘の世俗の生の為に祈り、かかづらい、そのために一喜一憂していること、また、「住吉の神」を祈り通してきたことに注目する。

第二節 問題点の考察 入道は自らも「心ぎたなく」と反省しつつ、娘や孫女の世俗の生に関わった。けれども、それは、地方官にまで下り下った家門を挽回するためでもなく、入道と別箇の生の、予め霊夢によって示された宿世を、親として実現させてやるための、ただそれだけの一筋の行為であった。自らの生とははっきり一線を画した行為であった。孫女に皇子が生まれたことを伝え聞いて明石君に送った消息には、自らが自覚をもって後世の準備をするようにと、しかと書き送っている。この一語が述べられていることで、入道の造型に作者の然るべき配慮が働いていることがはっきり知られるのである。また、次に入道は何故「住吉の神」に祈り続けたのか。それは娘に約束されている宿世に関係のある神であったからである。

第三節 「住吉の神」の考察 「住吉の神」は、皇室守護の神であった。「住吉の神」が単なる水路の神、水に関係ある神のみでなく、皇室守護の神であるということは『住吉大社神代記』という天平年間に造られた神祇官帳の資料として住吉大社から解文として提出された縁起を捜し出して、記紀にみられない記事を見ることによって始めて知ることが出来た。また古辞類苑神祇部によって奉幣、祈請、行幸、御幸等の記事を点検したところ、他社との明瞭な相違で上述のことを裏書きしていた。

以上のようにみえてくると甚だしく逸脱しているように見える明石入道も、一筋貫かれたものは見うるのであって、入道自身の最後の身の処し方も、自らに関する限りは、出家者としての道を買ったものということが出来る。

なお、「住吉の神」に対して「あとを垂れ給ふ神」という表現があって、諸注、本地垂迹説を用い、本地仏まで述べているが、此処は仏教本来の垂迹説を、ただ神に転用したのみで、いわゆる本地垂迹の意味ではないことを付説しておく。このことについては、後に第二篇「源氏物語の神仏習合思想」で詳述する。

第六章 紫上を考える

序章において横川僧都との対応をみておいたので、源氏物語における世俗の人物、貴族として、まず紫上にみられる宗教性について考察する。物語の中でも、その高度な宗教性——それは専ら深い内省における敬虔な姿勢を描かれていることを指すのであるが——を示すのは夫たる光る君よりも紫上の方が早い。そのことゆえもあって先に考察することにしたのである。

第一節 夕霧巻の一節の解釈について 夕霧巻に「女ばかり、身をもてなすさまも所狭う、あはれなるべきものはなし、云々」という女性観を述べた一節がある。従来この部分は古い注から今日に至るまで紫上の述懐として扱われ、また紫上を論ずる者は殆どこの部分にふれて紫上の感慨として述べている。けれども詳細に読んでみると、その叙述は潤いがなく客観的であり、語彙の面からいっても、考え方の展開の仕方からいっても、男性のものである。文脈からいっても、この場合は光る君のものとするのが妥当であると思われる。すなわち、この女性観が述べられているところは、夕霧が柏木亡き後の一条宮に懇ろであるという噂が立って、父親である光る君が当惑しつつ正妻雲井雁一条宮両者のことを慮り、女性の運命について思を致すところであるので、後半を紫上のものとするのは筋が通らないのである。紫上は、この時点では、自らの生の終に対してどのような対処をなすべきか深い慮りのうちにあるのであって、この時も、光る君が一条宮のためしに則って、自分の亡い後の紫上について「うしろめたく」思う旨を述べたところ、顔を赤らめ、無言の対応を示しているのみであったことを叙されている。

第二節 若菜下巻の一節の解釈について 若菜上巻で、晴天の霹靂のようにして女三宮が興入れして来たことから、紫上は人の世の情愛というようなものの頼み難さを痛感し、光る君の愛情のみをその生の支えとしてきた生活は根底から覆されざるを得なかった。光る君の側からすれば、女三宮との対比においていよいよその愛情は深まりこそすれ、変わるものではないと思うのであるけれども、今やこの世の生を「見はて」た心地する紫上は切に出家を願っている。このような時に、六条院最後の栄光の場面ともいべき女樂が催された。成功裡に終わったその夜、光る君は自らの生活を回想して感慨を述べ、光る君に語りかけられて紫上もその思いを述べる。

光る君は、その恵まれた生活の半面、充されぬ思いの数々あることを述べて「それにかへてや」——〈その代りとしてか〉——思いのほか永らえたと述懐している。そうして光る君の保護のもとにある紫上の生活を、深窓に守られている如き幸せとして、自らも自覚しているであろうと問いかける。それに対して紫上は〈過分な幸せとよそ目には見えるかもしれない自分の身の上ではあるが、自分としては耐ええぬもの歎かしさのつきまとう生と生きてきた。考えてみれば自分の場合には、この耐ええぬ歎かしさが祈となってここまで来られたのかもしれない〉と答えている。この場面の紫上の答は難解で『岷江入楚』の注解以上のものは未だみられない。『岷江入楚』の解も、字義の上では一応は読み解きえていると思うが、この答を指して、全体的に「源へのたはぶれのやうにいひなし給ふなり」という解釈が加わってくると問題を感じざるをえない、すぐ続いて、「まめやかに」は」といって出家を願っている、前半たわむれ、後半まじめな申し出で、と対比的に受けとめているのであろうけ

れど、紫上のこの場面の対応としてはもはや「ざれ」はありえないのではないと思われる。自分は「それにかへてや」と受けとめる光る君に対して「自らの祈なりける」と受けとめる紫上の方に深い受けとめ方を看取し、未だ世俗の世界で一応の充実感をもっている光る君に対して、すでに深い苦悩を経験した紫上の方がはるかに深い思慮を示しているものとみるのである。〈もの歎かしさが祈となってここまで来ることが出来た〉という考え方には「苦しみ悩みは恵みへの契機である」さらにいえば「苦しみ悩みは恵みである」という敬虔な受けとめ方を、見うと思う。当時であっても、加持祈禱だけが祈りではない。源氏物語にも多くの用例が見られる「神仏に祈る」というような用例では、もっと抽象度の高い「祈」の用例がみられるのである。

第三節 御法巻冒頭の一節の解釈について 紫上の宗教的敬虔な思を見うるものに、もう一ヶ所序章でふれた御法巻の内省がある。本論ではこのことにふれて再度詳しい考察を試みたが、要旨としては序章に譲ってここでは省略する。

紫上の内省の深さ、そこにみられる宗教的敬虔さというものについては、一貫した健気さがみられる。それは少女時代からの、利発なそうして真摯な態度、他者への思いやりの配慮等々、紫上に与えられた理想性の到達した美質として考えられる。紫上の生涯を以上のように捉えて、悩みの故に深い内省をもちえた人、悩みの中であって、自らを破らずに、むしろそれを越えることをなした人として考えることが出来るならば、平安時代の貴族女性として到達しうる最も高い所に到達した人物として造型されていることを思わざるをえない。

出家という善行を阻まれたとき、内に省みて前生からの罪障を思い到るということについても、それは三世因果の考え方ではないかという意見があるかもしれない。しかし、もただそれだけのことであったのなら、宿世の罪はこの世の精進で解決することが出来るとする楽観的な見方か、機械的な宿世観に捉われた、虚無的な無気力な姿を曝すにすぎなくなるであろう。そういう危機に面しながら、しかも主体的に健気に受けとめているところで、三世因果の考え方に則りながらそれを越えた、紫上独特の内面性を獲得しているとみるべきかと思う。

第七章 光る君を考える

いわゆる正篇の主人公としての光る君は、すでに早い頃から深い省察をめぐらす人物として造型されている。けれども、絶えず物語を前に押し進めるべき存在として、徹底性をかいていた。その点では、光る君の手中にあって守られているようであるけれども、それだけに束縛も経験しなければならなかった紫上の方が、深い苦悩の体験とともに、そこからの脱出として、内面的な自由、精神性、宗教性を、先駆けて獲得していたのであった。しかし、光

る君も、最晩年において紫上を失うことによって、徹底した内省の姿を示すようになっていく。その到達した所として、幻巻における生涯回顧の述懐を吟味し、遡ってそれが光る君の生涯にどのような意味をもつものであるかを考察する。

第一節 御法・幻巻の生涯回顧 光る君の生涯回顧に関する叙述は、御法巻にもみられ、その相違する点については後に述べるが、共に前章「紫上を考える」でふれた若菜下巻の回想とは一線を画する共通点が二つある。それは紫上との死別を契機として省みられる生涯を「悲しく常なき世を思ひ知るべく、仏などのすすめ給ひける身を」（御法）「世のはかなく憂きを知らすべく、仏などの掟て給ひける身なるべし」（幻）と、自らの運命の欠けを仏の赴けと受けとめていることが一つ、二つには「ひたみちに行におもむきなむに、さはり所あるまじきを」（御法）「今なむ露のほだしなくなりたるを」（幻）と出離への姿勢をみせていることである。生涯を省みて、その生の充たされないところに、仏の計らい、善巧方便を観取していることは、それを代償に生命を永らえ得たなどという考え方とは次元の異なるものを観取することが出来る。そうしてその計らいを素直に受けて、出離への姿勢に思いをいたしているのである。光る君は、その生涯の折あるごとに出離の願をほのめかしてはいる。十数回を数えることが出来るであろう。しかし、この時以来決意は固く、幻巻の翌年には嵯峨院に隠棲出家して、然るべき勤行の時を過ぎて世を去ったことが宿木巻に見えている。

つぎに両者の違いをみる。御法巻での思惟は、紫上に死別直後忌に籠っている時のものであった。それゆえ、その思惟は死別による無常の経験が強調されそれが中心となっている。けれども幻巻の述懐では、もう少し余裕をとり戻して「口惜しき契りにもありけるかな、と、思うこと絶えず」として「世のはかなく憂きを知らすべく」といっている。この「口惜しき契」と思い「憂き」と受けとめられるべきものこそ、光る君の生涯において最も問題とされていることを知るのである。次にその内容をみよう。

第二節 幻巻における回顧の考察 (一)藤壺追慕 光る君は、その生涯の最初において、藤壺への思慕で躓いた。そのことをずっと思いつめてきているのではないか。「口惜しき契」といい、「憂き」と受けとめるべきと示されたことは、まさに藤壺との問題であることが知られる。それには傍証がある。先にふれた若菜下巻の回想の中でも「あじきなく然るまじき事につけても、あやしく物思はしく、心にあかず覚ゆること添ひたる身にて過ぎぬれば」といっていることである。これは、幻巻と同質の、しかも、さらに詳しい内省を垣間見させているものと考えられるからである。

(二)藤壺との問題考察 藤壺との問題に関しては、生涯戦く心を持ち続けなければならなかった。そこには常に「罪」の語も用いられていた。ただ藤壺との間の問題で罪というとき、一般に不倫を考えられているようであるが、それは違うのではないか。光る君が桐壺帝に懐く

怖れは、あれほど信頼され、愛された者への裏切ということであると思う。それは薫の出生の折、順現受業で報いられたゆえに、後世の罪が軽められたと考え、以後そのことについてはふれられなくなることでわかる。光る君にとって、藤壺との間で本当に罪として意識されたのは、その最後の時まで心に担われていた愛執の罪としてではなかったかと思う。それは、桐壺帝に対してではなく、仏の真理に背くこととして意識されたのではないか。それは仏教では最も重い罪だからである。朝顔巻で紫上に語った藤壺への思慕（暗示的なものであったが）は、それゆえに境を異にした藤壺の悩みを引出したのである。

（三）六条御息所との問題考察 六条御息所に対して懐いている悔恨の情は、物語の中で繰り返し語られているが、若菜下巻で紫上に縷々と語ったものの中にその全貌がみられる。しかもそれを契機として紫上・女三宮を苦しめる死霊として跳梁する姿にならざるをえなかったのがあった。

（四）紫上との問題考察 以上のようにみえてくると、幻巻における光る君の生涯回顧の内容には、藤壺への思慕で躓いたゆえに、六条御息所をも、紫上をも悔恨の多い生涯の道連れにしてしまったという思がこめられていることを見る事が出来よう。幻巻において、光る君は紫上を先立てたという単純な喪失の悲しみにくれていたのではない。自らの愛執によって紫上を苦しめた思い出が、痛恨をもって回想されているのである。

（五）幻巻の生涯回顧の意味 このように見てくると、幻巻の「口惜しき契」は、藤壺を中軸とした光る君の愛執の生涯を指すものであり、仏は、まさにその愛執の生活を通して「世の憂さ」を知らしめられたと自覚しているととれる。偉大な主人公である光る君の生涯において、その最も弱きところである愛執の罪の回想、この点を通してまさにそこに仏の善巧方便が働いて、救に導かれたと自覚する光る君の姿は銘記すべきである。それは、光る君の生の背後に仏の慈悲があったこと、光る君の生のすべてが、仏の慈悲に包まれてあったことを悟りえた証しであるからである。

幻巻は、紫上の鎮魂の一年であるといわれるが、そのもっと奥にある藤壺を中軸とする（紫上もふくまれる）光る君の愛執に充ちた生活を、仏の慈悲に委ねるための一年であったと言えるのではないか。

第八章 浮舟について

——宇治十帖末尾の考察——

横川僧都の消息は、浮舟に対する慈しみと、行届いた配慮と、将来に対する期待とがこめられていた。にも拘らず浮舟は、僧都の消息を受け入れることを拒んだ。そこには僧都との間に落差があったからである。この扱い方に宇治十帖の貴族と正篇の貴族とは異なるものが

あることを示している。その一例として浮舟を考察した。

第一節 浮舟と僧都の消息 浮舟は僧都の消息を慥かに見た。事態も察知出来た筈である。けれども拒んだ。僧都と浮舟には落差があったからである。

第二節 浮舟における薫の問題 僧都の懇ろな諭しに対して浮舟は答えられなかった。それは、浮舟には浮舟としての一貫した心情があったからである。妹尼の留守中、中將の訪問を逃れて母尼の部屋に忍び入り、まんじりともせず明した夜、浮舟は初めて自分の過去を振り返り、匂宮にほだされた自分を反省して、薫と匂宮との価値転換をその心に銘記したのであった。浮舟はそこで自分の過去を清算し、折から山を下りて立寄った僧都に切願して出家を遂げる。浮舟はその主体的な行為のゆえに、物語の中の誰よりも出家の悦びを克明に描かれている。

ところで浮舟は匂宮の愛情はもとより、中將の好意もすべて否定し相対化しえたのであったが、その場合一つだけ齟齬があった。匂宮と薫との価値転換という形で匂宮の情を否定したために、その場合当然同時に否定さるべき薫の情がとり残されてしまったのである。そして薫の愛情への負目がその心の自由を奪ったのである。浮舟は薫にほだされるような形でその愛情を否定し残したのでないけれども、本来は虚像でしかない薫の愛情に対する自責の念に悩まされ、必要以上に酷しくそれに対抗しなければならなかったのである。

浮舟の自己否定がもう一步徹底していたならば、しんそこ人間存在そのものの破綻が凝視され、その欠けの認識がすべての存在を相対化し、薫の愛情にも否定さるべきものが存在することを見抜くことが出来た筈である。そうして、そういう欠けを内包する者同志の相対的愛情として、その愛情はその時こそ本当に新しく捉え直され、位置づけられたであろう。そこに、痛みをもつもの同志の配慮が生まれてくる筈であり、そこに自ずと対処の方法も生まれてきた筈である。そうして、その時こそ「愛執の罪を晴るかし」あう世界が開けてきたであろうと思うのである。

第三節 貴族一般の出家と内面の自在性 あのように自在な捉われぬ心を持つ僧都を描きえた作者は、どうしてこの場合の浮舟に同じような自在な心境を与えなかったのであろうか。それが当時の貴族の現実であり、出家をしても、内なる人の解放が伴わなかった。僧都の心境を描きうる者として、作者はそれを掲げて、むしろ浮舟的現状を対比し、それによって現実を指し示しているのではないか。

源氏物語の宗教性という題を掲げながら、宇治十帖では、世俗の人物を、第八章でとりあげる浮舟しか扱わなかった。それは、物語が、宇治十帖においては、人物の扱い方が正篇とは異なることを思うからである。宇治十帖には、八宮、薫のような宗教的傾斜をもった人物が

存在する。この中に大君を加えてもよいかもしれない。また浮舟もその群に加えてもよい人物であろう。けれども、これらの人々は本当の意味で宗教性を発揮していないのである。これら宇治十帖の世俗の人々、皇族、貴族に属する人々は宗教的傾斜をもちながら宗教性を発揮することなく、むしろ互の思い込み、憶測にとらわれた、行き違い、擦れ違いの悲劇をもたらす、そうした存在として扱われている。正篇にみられるような理想性を与えられてはいないのである。そのような世界に臨んで、彼方からの光、宗教性を指し示す存在として、横川僧都が唯一人描かれているのである。思うに宇治十帖の世俗の人々は、正篇で描かれた理想性とは別の、より現実即した、本当のいみで救われ難い姿を描かれているのではないかと思う。それも一つの宗教的な扱い方ではある。その救われ難い姿としての描かれ方を次の機会に考察したいと思うが、この度はその一人として浮舟を瞥見しておくことにしたのである。

第二篇 源氏物語の仏教の源泉となる教説

第一章 比叡山延暦寺の教説（概観）

第一節 顕著な徴標の探索 源氏物語に扱われている仏教的要素を考察し、顕著な徴標を求めて整理してみると、源氏物語と同時代に行われていた仏教いわゆる平安仏教といわれるものの中でも天台系のものが圧倒的であることが注目される。当時、天台系と同例あるいはそれ以上に盛に行われていたと思われる真言系のもは、殆ど例外的にしか出てこない。例えば、末摘花の兄の阿闍梨が東寺系であるとか、朱雀院が出家後退いた寺が東寺系の仁和寺を想定されるとか、しかもそれらは傍系的な存在に関するにすぎないのである。御堂関白記などをみると南部興福寺、華嚴宗総本山東大寺の僧侶等がその邸に招かれ、諸行事を執り行っている記録がみられ、そうして興福寺のことは藤原氏の氏寺でもあるので、じっくりみていくと大きな関りが考えられることが見出されるのであるが（それについては後に改めて述べる）一見したところでは上述のようなことが看取されるのである。

(一)天台系の教説 最も多く書字され、読誦される教典は法華経であり、中心人物である藤壺、光る君、紫上、明石中宮などが主催する重要な仏事が法華八講であり、雲林院に籠った光る君が、天台六十巻という天台の重要文献を自らも読み、かつ解説させて耳を傾けていることも叙されている。

また光る君が嵯峨野に造営した御堂で行う普賢講、阿弥陀・釈迦の念仏も、天台系の行事であり、葵上を先立てて悔多い心に経を読みつつ「法界三昧普賢大士」と唱えるその作法も天台系のものである。

北山の僧都が、若き光る君に印象づける行法「朝懺法、夕例時」の作法一後の朝題目、夕念仏一も天台の中心的作法としての止観業中の四種三昧、法華三昧と常行三昧からの流を指摘出来るものである。従って念仏も後述する往生思想を反映する念仏のほかに、天台系の念仏の姿もみられるのである。

(一)往生要集の思想への移行 よく見ていくと、たしかに天台系から派生してきたものと思われる、横川の恵心僧都源信の著『往生要集』に勧められている往生念仏の姿勢を現すものも指摘される。特に出家の考え方、念仏の作法にはっきりその姿勢を打出しているものもある。

(二)園城寺系の行法 記録類では叡山あるいは延暦寺といわれて一括されているけれども、延暦寺からは離脱した園城寺の、密教的色彩の濃い行法、また、延暦寺と園城寺の接点となる一延暦寺からは別所といわれている一無動寺の行法、後の回峯行に連る行法が「常不軽をつく」という表現で、宇治の阿闍梨に行わせられている。それは、往生覚束ない八宮が、阿闍梨の夢に現れて訴えたことに答えてなされたものだが、宇治の辺りの寺々、恐らく阿闍梨の寺などは物語の時代は園城寺に属するものが多くあった筈でもあるのである。

以上のようにみえてくると源氏物語に扱われている仏教の顕わな徴標を整理してみると、平安仏教といわれるものの中でも天台系のものが圧倒的であり、純粋に天台の教学を反映しているものと、天台からでた往生思想、後の浄土教に移行するその以前の『往生要集』が掲げた念仏往生を反映していると思われるもの、また天台から別れた園城寺の行法を映したのもみられるとiiいうように思う。

第二節 物語作者と往生要集・園城寺の行法との関係 (一)往生要集と作者との関係 往生要集の成立を寛和元年とし、それが二十五三昧会の同人の為にかかれたものとするならば、時代の先後、本朝麗藻の詩人グループ、一勸学会の同人一二十五三昧会の同人という関連は考えられなくはない。本朝麗藻の詩人グループに父為時がいることを思えば、何らかの関連は考えられるのではないか。

(二)物語作者と園城寺との間に介在する定暹 源氏物語の作者の身辺を洗ってみると、定暹という異母弟、康延という母方の叔父が存在することがしられる。紫式部に、特に園城寺系のものを通して、天台の教説を導き入れた者はこの定暹、康延辺りでなかったかと思われる。しかもどちらかといえば定暹の方がふさわしい様に思われるので、次に定暹との関係を詳しく考えてみる。

第二章 紫式部と定暹

第一節 物語作者に仏教的素質を与えたものは定暹ではないか 源氏物語研究史の上で作

者の仏教的素養を考え、その師を考えて檀那院贈僧正覚運を擬するようになったのは、源氏物語の注釈書でも最も古い部類に属する『源中最秘抄』であり、これが『河海抄』に受継がれて殆ど承認された形になっている。

けれどもその人柄、行動、時代を考証して肯けない問題を多々発見したので、むしろ源氏物語作者の身辺を探って身近な人物、異母弟の定暹（園城寺律師）を探りあてた。

第二節 紫式部の家系の中の定暹 記録類と尊卑分脈とによって歴史的な考証をもって吟味した。

第三節 園城寺蔵「阿闍梨伝法灌頂血脈」の中における定暹 探求の歩を進めて園城寺の『阿闍梨伝法灌頂血脈』の写しを借覧する幸せを得たので、それによってその灌頂を受けた師伝の系統阿闍梨から律師になった年代の考証等新たな考察を示した。

第四節 園城寺の教説・行法の研究 円珍による園城寺の教説は延暦寺のそれと大差ない由であるが、密教関係では円仁に加えるものがあつた。特に指摘すべきこととしては、物語に描かれる常不軽の行法が、延暦寺と園城寺の接点である無動寺の行法であるということである。

第五節 物語において顕著な諸徴標は天台系のものである 概観の項でふれておいた通り、典籍、諸行事、諸行法殆ど天台系のものである。

第六節 近親者に僧侶を持つということについて 定暹の師勝算等という人物に、物語の僧侶のすぐれたイメージのモデルを見出しうるのではないか。

第三章 源氏物語と往生要集との関係

第一節 往生要集と物語作者との関係（詳説）源氏物語と往生要集との関係などということとは当然なされていることと思われたが、筆者が着手した頃は正面から扱われていなかった。時代考証をしても約十五年～二十年位先に成立しているものであり、恵心僧都が、『往生要集』をそのために書き与えたといわれる「廿五三昧会」の同人は勸学会時代為時の友人であつた『本朝麗藻』の作者文人達も加つているので、そういう錚々たる人達と為時との格差を考へても、為時を通して話は耳に入ったであろうし、定暹、康延を通して何らかの噂は伝わつたであろうと思われる。

第二節 源氏物語との関連に向けての往生要集の吟味 往生要集の主眼とするところの物語の厭離思想について考察する。

第三節 物語の叙述にみる往生要集の影響 物語の中に、往生要集との関係でみた方がより興味ある理解が出来る表現がいくつか指摘出来るので、その関係は想定出来るものとして比較考察した。例えば阿弥陀を弥勒と対比させたり、六道の思想をとることなどである。

第四節 往生要集の思想は物語作者に応用されたに過ぎない、源氏物語の作者が、その念仏思想をどれだけ信じ得たかは問題のあるところで、後述する興福寺系の法相宗の考え方の浸透と考量しなければならない問題と思われる。

第四章 興福寺の教学（法相唯識）

源氏物語に叡山関係の仏教が色濃く影を落としており、中で専門家としての横川僧都の造型には、天台宗が標榜する大乘仏教の菩薩思想を彷彿するものさえ看取されることをみてきた。

一方、物語世界での中心人物である世俗の人々をみると、彼等貴族の行う供養・法会の儀式等とはもかく、それらとは別にその生活感情的言動に思をひそめてみると、その心情の奥底には、もっと生活感情に密着した仏教的思考が垣間見られる。これらのあるものは、作者の深層心理の中にひそんでいる仏教思想の、時につきあげてきて作中人物の言動として形象されずにはおかれなかったのではないかというような感じさえ懐かせられるものがある。このような仏教的思考の源泉となるものを尋ねると、それは前代奈良時代から行われてきた仏教、法相唯識の思想に源を発すると思われるもの、またその寓宗として深い関係にある俱舎論に源を見出すことが出来るのではないかと思うものなどがある。

恐らく作者の中で意識的に志向する場合は、平安新仏教の指し示すものを最高の理想をして認めざるをえなかったであろうし、それを掲げて誠実にそれを追求したのであろうけれども、心の奥底にすでに長い間培われてきた生活感情に浸透している伝統仏教の思想が潜在的にあって、現実を凝視するとき、それはそれとして深い真理を宿するものとして、独自の人生観を形成させるほどにその心を捉えていたのではないか。そうして、実生活の中ではむしろその方が真実味をもって働き、作者自らの生活姿勢を形造らせていたのではないかと考えるのである。

第一節 人物の扱いにみられる法相唯識の思想 意識的な表現が行われていて、徴標の読みとれると思われるものをあげて考察する。

(一)六条御息所の生霊、死霊の扱いにみられる唯識思想 これは法相の認識論で標榜される阿頼耶識の唯識的認識と思われること、(これは紫式部家集における物語の絵についての歌に「心の鬼」として詠まれていて傍証となる。) (二)横川僧都の言葉に「たね」と特にいわれているものが指し示すのは、唯識論における「種子」^{しゅうじ}を意味しているのではないか、(三)薫の出生を「順現法受業」でうけとめる光る君の応報思想が、業感縁起として俱舎論・法相宗に共通の考え方である、(四)御法巻冒頭にみられる紫上の深い罪障意識が五姓各別の考え方に連るものではないかと思われること、(五)物語に大切に扱われている人物、桐壺帝、六条御息所、

藤壺、八宮等が往生なしえていないのではないかとと思われる描かれ方をしていること。特に六条御息所、藤壺は出家勤行をなしており、八宮も出家こそしていないが、その在俗の生活は、往生の為にのみあった様な姿勢であったにも拘らずである。救われ難い人間の現実を見据えた相宗の方向を示すものではないかと思うのである。

第二節 法相宗の伝来と日本における展開 (一)法相宗の成立と、日本への伝来 玄昉が入唐将来した法相宗第四伝と興福寺との関係、中で実践面における特殊な思想五姓各別について考察する。(二)五姓各別の思想に対する論争 最澄・徳一の論争、応和の宗論における良源、仲算の論争の吟味。(三)唯一・純粋な法相学を伝えた興福寺 平安時代における位置と、その僧侶の活躍を、御堂関白記、少右記、枕草子等に照らして考える。なお京都における唯一の法相宗の寺として清水寺があることも言及する。

第三節 紫式部の時代と興福寺 興福寺の教説、第一節、第二節の考察で、物語作者の身辺までその教説が伝えられていることをみた。家集、卒都姿を詠んだ歌で、その宗教的敬虔の心を示した作者が、法相唯識の思想におけるその認識論では阿頼耶識の思想、実践論では五姓各別の思想の思いをひそめて受けとめていたことは充分窺えると思われる。

第五章 源氏物語における神仏習合の思想

源氏物語明石巻において、「住吉の神」に対して「まことにあとを垂れ給ふ神ならば」という叙述がある。明治以後のものであるが、諸注すべて本地垂迹思想でこれを説き、本地仏まで出している。問題を感じるので、改めて源氏物語に神仏習合の思想がどのようになっているか、仏教の宗教性の問題とも関係があるので考察した。

第一節 源氏物語における神仏習合思想の反映指摘 源氏物語で神仏習合の思想を表しているところは二ヶ所、石清水八幡の「五師」、(玉鬘)加持の前の神分の祈禱、般若心経の読誦(手習)のみしかないこと、しかもそれは無意識の反映でしかないこと、を明かにした。

第二節 源氏物語における仏神の神仏の用例の吟味 源氏物語の中には「仏神」「神仏」の用例がみられるので、それが、仏である神、神である仏を表しているものかどうかをすべて点検、宇津保物語の用例も援用して、すべて仏や神、神や仏の意で用いられていることを検討した。

第三節 「住吉の神」における本地垂迹思想の歴史的考察 住吉の神に本地仏が想定されるようになるのは何時頃のことであるかを考察、考証して、源氏物語以前から源氏物語の頃までにはありえないのではないかと考えた。

以上によって「あとを垂れ給ふ神」の表すものは、勝鬘經義疏・法華文句第九下等に見られる、仏教内での、その本来の用例にならって、神の靈驗そのものに応用した用法とみる。

それには、更級日記、竹芝伝説の項にある用例の傍証も援引した。

参 考 論 文

一、うつほ物語における仏教的要素

序、うつほ物語と仏教との関係については、首巻俊蔭巻における、俊蔭波斯国漂流譚における仏の国の琴技求道の遍歴の部分のみが考察され、全巻にわたって考察されたものはみられない。筆者はうつほ物語の仏教的要素は、次元を異にする二つの世界が、それぞれ全巻を貫いて描かれていることを看取するゆえに、全巻を考察することによって、従来とは異った成果が得られるものとして行った。

二つの世界とは、一は仏の側から、前世からの因縁を開示して、将来を予言し、その予言が果されてゆくという形で描かれるもの。俊蔭巻から楼上巻まで、琴技に関する奇瑞譚を中軸とする。他の一つは、人間の側から仏に対する、信心の姿で描かれるものであるがこれも俊蔭巻から楼上巻まで貫くものとして、一般に宗教としての仏教の描かれる本来的な形で扱われているものである。

以上序文に掲げたことを、一、一の世界 二、二の世界と分けて考察詳述し、さらに、三で一・二で取りあげられなかった源泉としての仏教のこと、また仏教以外の儒教、老荘思想との関連についてのこと等を述べた。

結語、上述のような課題の設定と方法とで考察した結果、第一の世界のものとしてみることによって、従来荒唐無稽といわれていた俊蔭巻における、俊蔭波斯国漂著以後の物語、琴技の伝受と霊琴の将来のこと、また俊蔭巻から始まって楼上巻まで一貫してみられる霊琴の奇瑞譚が、すべて仏の側からの予言の実現として、見えざる仏の加護に与るものとして、人間の世界とは異なる次元のものとして、その超自然的な性格を納得させることが可能になることを見得た。そうして同時に、その霊琴の音が天変地異その他不可思議な現象をもって人々を感動させるのみでなく、人々の心に慰めを与えるものとして内面化をみせていることをも注目した。次に第二の世界である人間の側からの仏教信仰の面では、兼雅に迎えられて貴族の一員となった俊蔭女、仲忠が仏教的な思考において敬虔なものを示し、とくに俊蔭女は、その父俊蔭の供養に、また自らの終焉に対する備えに、然るべき仏教的行事を考えるなどの、一般に考えられていることよりも深いものをみることが出来た。

二、源氏物語と白氏文集

源氏物語と白氏文集との関係を、出来るだけ厳密な意味での比較文学史的方法で扱った。

第一篇 媒体としての白氏文集探究

第一章 源氏物語と中国文学影響関係ありと思われる作品検出

厳密を期すために、従来影響関係ありといわれた作品との関係を、(一)引用、(二)言及、(三)類似の三類に分け、(一)、(二)、(三)の順位によって、またその頻度数の多寡によって親密度をはかり、本当に影響関係のみられるものを選び出した。その中で白氏文集は最も親密なものとして検出された。

第二章 源氏物語に影響を与えた白氏文集 源氏物語引用の長恨歌に徴して系流を探る

源氏物語葵巻に引用されている長恨歌の語句が現行の文集詩と異なることから探り、同じ語句を用いている唐時代の文集の写しを見出し、その他の語句も調査して、現在日本に見られる白氏文集のすべてを系統化した。

金沢本系（金沢文庫本、管見抄、三条西本）

朝鮮本系（朝鮮本、那波本、四部叢刊本、慶長勅版本）

宋本系（影印本）

明本系（嘉靖十七年刊本、馬元調本）

江戸初期刊本（慶長古活字本、慶長頃刊本、元和刊本、寛永頃刊本）

（清朝 汪立名本）

などである。そうして、源氏物語と対照しうる白氏文集は、金沢文庫本系統の形態においてなすべきであることを考証した。

第三章 源氏物語の作者が手にした白氏文集は七十巻本ではなかったか

白氏文集の系統化をなすとげた頃、京都大学の人文科学研究所で白氏文集校勘作業が始められていることを聞き、その成果がぼつぼつ公刊されるようになったのを知り、それらを考慮に入れて考証したのが第三章である。白氏文集伝来の歴史、それ以後の文章生出身の学者文人の研究、記録等により、また、為時の『本朝麗藻』所収の詩と白氏文集との比較、江東部集の詩から考えられる江匡衡と藤為時との交友関係等の考証から、源氏物語の作者が手にした白氏文集は、七十巻本のそれではなかったかと結論した。

第二篇 源氏物語に与えた白氏文集の影響

第一章 源氏物語に於ける白氏文集受容の概観

源氏物語には、白氏文集の引用、言及、類似の関連箇所がおよそ百項ある。その関連の概観を詩題との関連で表示、扱い方の傾向を探った。

第二章 源氏物語と長恨歌

最も密接な関連のある長恨歌の扱い方をみて、その受容の様相を探った。その詩のどの部分をどのように応用したかということで、巨視的には源氏物語の主題とも関わるといえるような密接さを検証した。

第三章 源氏物語すまの巻に与えた白氏文集の影響

元和十年（815）詩人は江州司馬に左遷された。その時の行路における詩、四年間の潯陽における詩等総数五百篇は、白氏文集の数巻に、その他の散文と共に収められて、特別の印象を与える部分になっている。源氏物語作者は単なる朗詠詩、抜粋詩からでなく、七十巻の白氏文集をこなした者として、詩人の運命を知り、生涯を辿り、その詩情に共鳴し、その影響から須磨に退居した光る君のイメージを創作したのではないかと考えて、両者の共通する部分を実証的に考察した。

第四章 諷諭詩その他の影響関係について

概観によって諷諭詩の多い事を検出したので、諷諭詩にかけた詩人の自負、また「与元九書」「新楽府五十首序」「秦中吟十首序」等における詩論の与えた影響の著しいことを考察し、人生詩人白居易の諷諭詩個々の影響とともに、源氏物語作者の蛍巻における物語論にも影響を与えたのではないかとすることを考証した。

論文審査結果の要旨

本論文は、『源氏物語』の宗教的精神の諸相・特質・歴史的背景などを、主として仏教との関連において考察したものである。『源氏物語』にあらわれた仏教関係の記述については、すでに旧注時代からおびただしい注解が行われているが、その多くは、仏教用語の出典や故事にかかわる指摘にとどまるものであった。本論文は、そのような従来の研究の動向を批判的に踏まえつつ、物語の精神的世界の内深化を促す仏教的事象を人生観・世界観の視座から照射し、更に教理の仏教史的背景と基盤をも相関的に把握することを試みる。以上のような

新たな問題提起に基づく多岐にわたる論点を、集約・整理する見地から、「第一篇 源氏物語における仏教の宗教性の考察」と「第二篇 源氏物語の仏教の源泉となる教説」との二部に分けて論述しているのも故なしとしない。

「第一篇」の「序章 高度の宗教性を端的に示す二つの事例」において、まず物語と宗教との関係を、(1)当代の宗教的事象が行事として作品に影を落としている場合、(2)文芸的效果を高めるために宗教的な状況が設定される場合、(3)作中人物が自覚的に宗教的世界を志向する場合、及び(4)唱導文芸として機能する場合の四つの類型に分け、(3)の立場を当面の課題として設定している。その際、『源氏物語』の宗教的精神と仏教史的基盤との相関性を、絶えず視野に入れるべきことに言及しているのは言うまでもない。そうした観点から、浮舟に対して示す横川僧都の、万人救済への熱意と自在な言行に注目し、そこに天台の大乗仏教の「聖だつ」体現者を看取できるとする。一方、出家を希求しながらも、光る君の許諾を得られずに現世の苦悩を凝視する紫上の内省には、罪障の自覚が認められ、興福寺の教学である唯識法相宗の五性各別の思想が潜んでいると指摘する。『源氏物語』の中に、奈良時代の旧仏教の流れをとどめる法相宗の思想と、新たな時代に対応していく天台宗の思想の併存を確認し、それが一般貴族である紫上の理想性と、官僧としての横川僧都の現実の人生態度を、それぞれ領導している事実を明らかにした見解は注目に値する。これまで、天台教学の視点から一律に理解されて来た『源氏物語』の仏教について、上述のごとき新見を提示しつつ、本論文の主旨の所在を慎重に定めている点は、以下の論述の方向をも示唆するものとして見過ごしがたい。

「第一章 横川僧都(一)」では、浮舟にかかわる三回の言行を検討し、僧侶としての信念を貫くとともに、浮舟に対して自在な立場から慈悲と救済への道を指し示す僧都の人物像が、多角的に解明される。特に、「第二章 横川僧都(二)」においては、浮舟へ寄せた僧都の消息の内容を、『涅槃経』や『四分律』を援用しながら釈義し、還俗勸奨の真意を明らかにする。天台の「菩薩戒」の境地を横川僧都に読み取ることによって、浮舟の未来に対して責任を負う人物像が造型されるに至った意図と経過を克明に追究している。従来、僧都の消息をめぐる、浮舟への還俗勸奨説と還俗否定説が鋭く対立していたが、本論文の緻密な論証によって、前者の正当性が立証されたことは疑いを入れないところである。

「第三章 僧侶像」においては、卓越した横川僧都の造型に至るまでの、夜居の僧都・北山の僧都・小野の律師・宇治山の阿闍梨ら官僧の系譜をたどり、その中に、脱俗的「聖」のイメージが認められることを指摘し、更に菩薩への転化の可能性が託されている点についても述べている。主要な登場人物たちとの深い交渉を持つものとして描かれている僧侶たちの意義と役割を、上述のように理解することによって、『源氏物語』の宗教的精神の深化の過

程が、より明確に把握されることになるに違いない。

「第四章 源氏物語における『ひじり』について」では、『源氏物語』の僧侶像が「聖」への志向を伴って造型されている事実を前提に、「聖」の意味を広く中国の用例の検索をとおして考察し、主として儒教や老荘思想にかかわる「叡智」「先識・先見」「精通」などの原義に発するものであると説く。日本の用語もその例に漏れるものではないが、奈良時代後期以降、次第に仏教的な意義を帯びるに至り、『日本往生極楽記』において、はじめて「阿弥陀聖」「市聖」の用例を見ることができるといふ。いずれも名聞にとらわれない有徳・自在の人で、献身的な修行者を指す語であると注解している。『源氏物語』における「聖」は、名聞を超越した高德者で、自在な判断力と靈力を備え、主要な登場人物たちの精神的内面に密接なかかわりを持つ僧侶を指すといふ。彼等は官僧である故に、「聖だつ」者として描かれる場合が多いことは言うまでもない。中国の用例の解釈については、なお検討の余地が残されており、日本における「聖」の否定的側面とその思想的限界に触れない点にも疑義はあるにしても、「聖だつ」官僧たちが、慈悲や救済の場面において、人間的幸福の祈念者・招来者であったという指摘は、十分に説得力を持つものであるといえよう。

「第五章 明石入道の造型について」においては、明石入道が自らの生とは別途に、夢告によって敷設された明石の君の宿世実現に寄せた祈願の内実を明らかにし、皇室守護の神としての「住吉の神」に祈り続けた意味について述べている。入道を世俗の人とする所説を退け、出家者としての道を買いた宗教性を高く評価している点、及び「住吉の神」を水路の神とする通説を批判し、『住吉大社神代記』によって皇室守護の神であると規定する立場から、いわゆる本地垂迹説を否定していることは、今後、明石入道観の訂正を促す貴重な提言となるに違いない。

「第六章 紫上を考える」では、夕霧巻・若菜下巻・御法巻の、解釈上多くの疑義を含む一節をそれぞれ採り上げて、紫上の内省・思慮の深さについて考察し、深刻な受苦を恵みへの契機として捉え、新たな祈りへと転化する道心の人であるとともに、自らの罪障に思いをいたす理想的な女性像を看取している。それが単に三世因果の考え方に基づくのではなく、むしろそれを越えた紫上独自の宗教的内深化を示すものであるとも言う。また、夕霧巻の一節、「女ばかり、身をもてなすさま所狭う、あはれなるべきものはなし。」以下の文章は、紫上の述懐として解釈されて来たが、これを光る君の感懐として捉え直すべきであるという指摘は、従来の疑義を解消する新見として注目される。

「第七章 光る君を考える」においては、光る君がその生涯において重要なかかわりを持った藤壺・六条御息所・紫上に対する感慨の集約とも言うべき幻巻の、いわゆる生涯回顧の叙述を分析し、愛執の罪・善巧方便・慈悲の作用し合うところに出離への願望が生じたたと述べ

ている。光る君の道心を、上述の三つの契機によって理解しようとする試みは、本論文の創見として、今後、学界の関心を呼ぶことになるであろう。

「第八章 浮舟について」は、匂宮の情愛を否定し、薫の真情に心を寄せる浮舟が、人間存在そのものに内在する欠如への認識に乏しく、それ故に還俗を勧奨する横川僧都の消息の真意を理解することができなかつたと指摘する。天台教学に立って、自在に人間的魅力を発現する僧都と、出家によってもなお内面の解放を果たし得なかつた、救われざる浮舟との埋め難い落差に、仏道の理想と人間の現実とを対比的に読み取る所見には耳を傾けざるを得ないだろう。

「第二篇」の「第一章 比叡山延暦寺の教説」においては、『源氏物語』の仏教思想は、平安仏教の中でも特に天台系に基づく事例が多く、天台に発する往生思想、『往生要集』の掲げる念仏往生思想の投影と考えられる叙述が少なくないことを詳述している。一方、延暦寺から離脱した園城寺系の行法や無動寺系の常不軽の行法の反映も見落とし得ないことを指摘する。後者に関する所説は、『源氏物語』の仏教事象を的確に分析する上で、極めて重要な観点を提供することになるに違いない。

「第二章 紫式部と定暹」では、紫式部に仏教的素養を授けた僧侶として、異母弟の定暹と、母方の叔父康延の二人が考えられるが、前者の影響が強かったことを述べる。園城寺律師定暹の人物については、当代の記録類や『尊卑分脈』、園城寺蔵『阿闍梨伝法灌頂血脈』などの史料によってその輪郭を考証し、密教的色彩の濃い行法が紫式部に伝授されたと推定する。覚運から一心三観の教えを授かったとする通説を排するこれらの見解は、紫式部の仏教的素養の形成事情を解明するにとどまらず、『源氏物語』の仏教事象の理解にとっても不可欠のものと言えるであろう。

「第三章 源氏物語と往生要集との関係」においては、『源氏物語』の中に『往生要集』の痕跡を探索し、その影響を検証した上で、念仏思想を作者がどの程度信じていたかに疑義を提示し、むしろ法相宗の思想の浸透をこそ考慮すべきであると主張する。

「第四章 興福寺の教学」では、天台宗の影響と並んで、作中人物の多くが奈良仏教の影をとどめる唯識法相宗の思想に、自らの人生観や信仰生活の根拠を求めていたことを、『源氏物語』の中から具体的事例を挙げて詳述している。作者紫式部は、唯識法相宗における、阿頼耶識の認識論と、五性各別の実践論に深く思いを寄せていたともいう。通行の諸説を全面的に揺るがす提言として、学界に及ぼす波紋は大きいですが、本論文に示された細密な論証は、その正当性を今後も強く主張し続けるに違いない。

「第五章 源氏物語における神仏習合の思想」は、明石巻における「あとを垂れ給ふ神」の記述に着目、諸注すべて本地垂迹思想のあらわれとするのを否定し、仏教史をも勘合しつ

つ、仏教用語としての「垂迹」の本義に基づいて、神の靈驗そのものに援用したものであると述べている。『源氏物語』の宗教的背景として、神仏習合思想を想定することには慎重でなければならないとも指摘する。傾聴に値する所見である。

以上のように、本論文は、『源氏物語』の文芸性の一契機としての宗教的精神を、仏教思想史との関連において究明することを目的としたものである。「第一篇」においては、『源氏物語』に登場する主要人物の造型に、天台・法相の両派の思想が深く関与している事実を指摘し、「第二篇」では、その背景と基盤に、作者紫式部の仏教思想並びに奈良・平安仏教の史的展開の諸相を措定して、『源氏物語』の宗教的世界の秘儀を照射する。ここに示された幾多の創見は、今後、『源氏物語』の宗教的精神の解明に、新たな道を開く指標として、高く評価されるべきであろう。論述の過程においては、論点を丹念に追究するあまり、行文の上に重複が見られる箇所もないわけではない。また、仏教史や仏教思想について、考慮すべき記述も二、三指摘されなくもない。一方、『源氏物語』研究における人物論の成果を広く視野に入れての論考であることについては、これまでも随所に触れてきたが、更に、構想論や構成論との関連にもより積極的に言及することによって、本論文の内容は、一層補強されることになるであろう。しかしながら、これらのことは、いずれも本論文の学術的価値にかかわるものではない。

総じて、本論文は、先行の研究業績を批判的に踏まえ、しかも独創的な着想と綿密・周到な論証によって、『源氏物語』研究史上、未踏の分野を切り開き、斯学の水準を高めたものであることは、疑いを入れないところである。

以上の理由によって、本論文の提出者は、文学博士の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。